

重要なのは、1 カ月も雨がなければ給水制限に脅える不安、石油輸入が減ったとって暖房や物資不足に感ずる焦燥を掃討することである。山間僻地に何本もの電柱を立て、原子力発電によって送電するより、家畜排泄物などを原料と

するメタンガスにより小発電その他の使用を実現するなど、身近な物資の巧みな利用、国土に降る雨は1 滴たりとも無駄にしない様式こそ、誇り高い文化と思う。

会長就任の挨拶

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸荻義次



私はこのたび（財）日本植物調節剤研究協会の会長に就任することになりました。10 年前の創立当時から関係させていたゞいて参りましたが、この間の協会の発展は賞讃すべきものであり、その組織も仕事の内容も飛躍的に拡大致しております。このように大きく成長した協会の会長として、これをさらに発展させてゆく責任の重大さを思う時、その任に堪え得るか不安を感じずにはおられません。しかし、就任したからには力をつくして精励する覚悟であります故、協会職員はもちろんのこと、業界、農林省、試験研究機関その他関係各位の協力を願う次第であります。

会長が替ったからといって、協会のゆき方に特に変化があるわけではなく、従来の路線を中心に、多くの関係者の総意を入れて、いつそう建設的に進めるつもりであります。したがって、お気づきの点を腹藏なく知らせていたゞいたり、鞭達して下さるよう格段のご配慮を念願するものであります。

最近、農業の持つ役割として従来の食糧供給のほか、環境保全、緑地空間の提供などの意義が評価されるようになりました。それは、農

業にとって有難いことに違いありませんが、そのために農業の本命をゆがめてはならないと思います。農業の本筋は、あくまで食糧の安定供給にあるものと考えます。

その安定供給のために、戦後の農業は労働生産性の向上を目途に努力を傾注して参りました。先進農業国の生産性水準に接近しようと、機械化を図ったり、プラスチック製品や化学薬剤など文明の産物を農業に導入して、生産の能率化を推進したことは事実であり、多大の効果をあげるとともに、他面地力の減退とか、農薬公害など心配される状況もでてきました。

つまり、労働生産性向上の路線は依然として踏襲すべき目標ですが、その手段において反省すべき問題が明確になってきたと解すべきであり、反省した点は直ちに実行に移さなくてはなりません。現在一部に提唱されている有機農業とか無農薬農業にくみするものではありませんが、その精神には受け入れるべき点があると思います。除草剤の果してきた意義は真に巨大なものでありましたが、薬剤と草という関係のみでなく、農業の、そして広くは国土の中の循環要素として、その位置づけを明確にしてゆきた

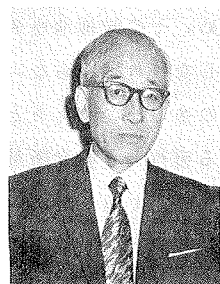
いと願うものであります。

それにしても大切なのは、協会内部並びに外部との信頼関係であります。現在、日本社会の最大の危機は、すべての人が被害者意識で加害者を悪と罵っていることであります。責任の回避と転嫁が横行し、日本を総がかりで破局に追いこんでいるかに見えます。公害についても被害者意識と同時に、自分自身のうちに加害者の

面はないかとの反省を要します。お互い人間には、勤勉と怠惰、忠誠と謀反、愛と憎、祝福と嫉妬を同時にもち、悲しい本性のあることを認識し、その傷口を労わり合うところに誠意が感ぜられ、信頼が生れ、協会の発展が可能と思うのであり、私はこんな気持ちで処したいと考えています。

会長退任にあたり

河 田 党



去る昭和48年12月21日、第3期役員任期終了に伴い、本会会長を退くこととなった。思い起こせば昭和40年6月、第1期役員の退任に当たって会長の席を汚して以来3期、8年半に及ぶが、幸にこの間、日本の経済成長の波に乗り、人手不足と生活程度の向上により、除草剤・生育調節剤の需要と品質改良の要望はいやが上にも高まり、これが物資豊富の助けを得て、本会の業務・内容も格段の発展充実を遂げることが、出来たと同時に、この間大禍なく会長の任を果たし得たことは関係各位のご協力ご支援の賜物と深く感謝する次第である。

顧みれば本協会の設立に当たって、私は何らお手伝いもしなかったし、その立場にもなかったのであったが、昭和40年1月、私があと1年以内に農業技術研究所長を退官する意図を明らかにしたところ、本協会の会長就任のおすすめがあり、お受けした次第であった。それも当時は、既に副会長も決まっており、会長の実際の事務と言ったようなものは殆んどないような状

態で、事実創立当時の事務所は大久保の蚕糸科学研究所内にあって、こゝには時々顔を出す程度に過ぎなかった。間もなく事務所を港区の第4森ビルに移したが、日ならずして副会長が急に他に転出することとなって、その後任人事が思うよう行かず、副会長の事務をしばらく私がとっていた。当時の協会の経済状態は餘り多くの人員を抱えていることは分に過ぎたことであつたので、副会長をおくのをやめてそのまま会長がその事務をとることとしたため、私の事務量は増した。特に会計などについて充分な形式が整っていなかったもので、かなりの煩雑が見られた。その後、協会の業務の進展と共に事務スタッフも整って来て、ようやくこう言つた事務も軌道に乗って来たが、これと前後して鴻巣市に研究所を設けることとなり、研究所長の専任も置けなかったので、会長が1週間に1度はこゝに行つて、試験の遂行状態や研究所の運営などに一応の目を向けることとしていた。しかし、これも3年前から専任の研究所長を置き、